グアヒーラ・グアンタナメラは、どのようにつくられたか。

エミール・ガルシア・メラーヤ

Cuba Now January 28, 2009 より。
前田恵理子訳

「グアヒーラ・グアンタナメラ」は、世界においてキューバを代表する音楽のイメージであり、その曲の存在の功績は、ホセイート・フェルナンデスが担っています。

グアヒーラ・グアンタナメラは、この 40 年間で最も演奏されたキューバの歌で、現在５０近いバージョンが知られていますが、その裏には、曲の生みの親を争う長い歴史が隠されています。

いくつかの調査によると、グワヒーラ・グアンタナメラの最初の公の演奏は 1929 年に遡り、ハバナのパラティーノ公園のダンス・フィエスタでの演奏でした。その公園では毎週日曜日、特に代表的な流行のバンダ・ティピカ1が人気を博していました。 このダンス・フィエスタには、当時の代表的楽団の中で一番人気があり、歌手のパブロ・ケベド(1907-1936)がいたアントニオ・マリーア・ロメロ楽団、チェオ・ベレン・プイグ楽団、ライムンド・バレンスエラ楽団と、ファクンド・リベロがピアノ担当のライムンド・ピア楽団が、出演していました。

1920 年代は、セプテート・ハバネーロ、イグナシオ・ピニェイロのセプテート・ナシオナル、セクステート・ボローニャなどの全盛期です。ソンは、飾り物、差別されたジャンルではなくなっており、「音楽社会」で独自の地位を確保しようしていました。マタンサスの町では、エストゥディアンティナ・ソノーラ・マタンセーラとアニセート・ディアスの生まれたばかりのダンソネーテの人気が出始めていました。ダンソネーテは、ネノ・ゴンサレス楽団と共演したパウリーナ・アルバレスの歌で名声を得ます。

ハバナは、カリブの傑出した音楽の都でした。毎晩市内の劇場では、人びとは、スペインのサルスエラ、オペラ、ボードビル、歌謡曲の大きなコンサートを称賛したり、週末にはニューオリンズからハバナへの稲妻日程で来ていたデキシーランドのバンドも聴くこともできました。

この同じ 20 年代にハバナ・フィルハーモニーオーケストラが設立され、音楽ナショナリズムがアレハンドロ・ガルシア・カトゥルラとアマデオ・ロルダンの手によって旗を揚げ始めます。また、劇場の映画でも、プラドの屋外でも、あるいはベラスコアイン通りとサンラサロ通りのヴィスタ・アレグレカフェでも、シンド・ガライ、マヌエル・コロナ、マリア・テレサ・ベラ、その他のトロバドール達がギターの衝撃を受けます。その一方で、エルネスト・レクオーナがキューバ音楽に必要不可欠となりはじめます。ともかく、演奏された歌唱つきのダンソンとバンダ・ティピカは、当時の音楽活動の重要な要素であり、もちろん、三声の作用でソンに新しい局面を与えていたトリオ・マタモロスもそうです。マタモロスのシロ、クエト、ミゲルが歴史に登場しました。

では、ホセイート・フェルナンデスとは誰でしょうか？

ホセイート・フェルナンデスは、1908 年のハバナのロス・シティオス地区生まれ、葉巻巻き職人、靴屋、左官見習や砥石職人から、1927 年にネプトゥルノ通りとコンスラード通りの間のドン・レオネル・グスマンの「金のハサミ」という仕立屋の見習いになるまで様々な仕事をしました。グスマンは、当時の最高のミュージシャンの仕立屋であることを誇りに思い、店の入り口には、ハバナ滞在中の仕立てを任されていたエルリコ・カルソの写真を掲げていました。

パブロ・ケベド(*)は、当時のダンソンのすぐれた歌手で、その後も生涯、名声を博します(*)。それぞれの楽団は、踊るひとびとが好んだ声域に最も近い声をもった歌手を探していきます。この理由で、最も重要なバンダ・ティピカの指揮者たちは、外見と、ロメオ楽団の歌手、ケベドに近い声域までの歌手を探そうと決めます。この歌手探しの中で、ライムンド・ピアは、仕立屋の「いつも歌ってばかりいて、声のいい青年」見習いのことを聞いて、推薦を受けることを決心します。

ホセイートは、家族には誰も音楽に関係のある者はいなかったのですが、友人が時折、臨時収入を得るためにセレナードを歌うアルバイトをしているのにつきあっているときに、自分の好みを発見しました。ホセイートは、グアヒーラの偉大な演奏家の一人とされ、その当時に長いキャリアをスタートしたチェオ・マルケッティにあこがれていました。ホセイートが働いていた仕立屋の主人が、ライムンド・ピアのところに行くように勧めた時に、ホセイートの運命は完全に変わります。

恐らくは、新米のミュージシャン、ホセイートの中に目覚めていたマルケッティへのあこがれが、彼に農民の音楽に近づけさせ、多分初めて彼にグアンタナメラを即興のカルテットの集大成として理解させたのでしょう。これが、楽団の一員となったばかりのホセイートが、ライムンド・ピアに「彼のデビューとなるダンス・フィエスタで何かを変えるためにホセイートによるグアヒーラでもって演奏が終わる」ことを提案させた理由です。

1929 年のある日曜日、パラティーノ公園でのダンス・フィエスタで、グワヒーラ・グアンタナメラが初めて演奏されました。この時以降、この曲は、ライムンド・ピア楽団の公演のフィナーレとなりました。その時までは、ダンソン楽団の中で伝統だったのは、「フェフィタ」、あるいは「バレットのボンビン」、あるいはまた 20 年代のダンソンで最も人気があった「トゥリヘミノ」が演奏のフィナーレとしてしばしば演奏されました。この「トゥリヘミノ」は、終わりから３番目の音節にアクセントのある音で終わるソンで、ミゲル・マタモロスのソン「麻痺患者」に、着想を与えるに至りました。

アレホ・カルペンティエルの著書である『キューバの音楽』によると、「グワヒーラ・グアンタナメラ」は、ソン全盛時代の 20 年代に広く流布した作者不詳の、８音節４行詩の農村民謡のひとつで、ホセイート・フェルナンデスの歌声のおかげで広まります。この曲の中にはスペイン系先祖の要素が見られる・・・ロマンセ（中世のスペインで盛んだった８音節詩句の小叙事詩）の再現であり、その歌は、農民の心を維持しています。」

ホセイートの家族の大部分、基本的には彼の兄弟と子供たちや一緒に働いたミュージシャンへとのインタビューを含む綿密な研究は、知られている彼の恋人たちの中にはグアンタナモ出身の女性はいなかったことを示しています。推測されるのは、彼が働いていたモンテ通りとエステベス通りの交差点にあった放送局を訪れていたある女性との間の短い恋の可能性です。しかし、これは、ホセイートが自分の楽団を作った 30 年代中頃に起きていたはずでしたが、作品が初演されたのは 1929 年でした。

1929 年から現在までにグワヒーラ・グアンタナメラが辿ってきた道には、さまざまな出来事が記録されています。おそらくとても重要なことのひとつは、ラジオ番組、「今日の出来事」の番組のテーマ音楽として使われたことかもしれません。この番組は、ＣＭＱラジオ番組により、初めはプラド通りのスタジオから、後にはベダードの 23 番通りの新しい本部から 10 年間放送されました。このことは、1939 年から 1952 年の間に起きたことがはっきりとしています。この番組では、当時の新聞が伝えていた「赤いニュース」の内容が語られました。このことから、この曲は、広く普及することになりました。

とはいえ、この曲が国際的に知られるのは、カーネギーホールでアメリカ人歌手のピート・シーガーがホセ・マルティの詩を入れて歌った 1967 年に始まります。そして、今日と同じように、勝利の行進が、このコンサートの成功の翌日から始まります。経済的利益をめぐって論争が始まります。この曲の収穫期が到来したからです。

同様に、50 年代にグループ、「オリヘネス」のメンバー、キューバ人ミュージシャンであるフリアン・オルボンが、ホセ・マルティの「素朴な詩」をポピュラーなメロディーに組み込み、彼の自宅で友人たちの集まりで、この先進的なグループの友人たちやメンバーの前で歌っていました。「オリヘネス」のメンバーのひとりのシンティオ・ビティエルは、そのような内容を証言しています。60 年代、オルボンの弟子のひとりである若いミュージシャンのエクトル・アングロが、オルボンを通じてこの仕事を知っていて、アメリカにキューバ政府の奨学生として滞在していた夏のキャンプの間に、自分の曲として歌いました。キャンプでの滞在中、アングロはピート・シーガーを知り、二人は、そこに合宿していた子供たちにグワヒーラ・グアンタナメラを好んで歌いました。

ホセイート・フェルナンデスは、こうした出来事に関係なく、クアルテータ（８音節４行詩）を使って同じパターンで自分のグワヒーラ・グアンタナメラを引き続き歌っており、海外で起きていることに気付かないでいます。ホセイートは、60 年代になると厳しい試練に直面します。つまり 50 年代にベニ・モレが流行らせた「私が歌うから、君が選んでくれ」という曲の原作者についてのいろいろな疑問が生じたのです。

70 年代になると、ピート・シーガーは、カサ・デ・ラス・アメリカスの招きでキューバを訪れます。そして、キューバ人のポピュラー歌手たちと会ったことから、彼とグアンタナメラとの関係に関して、あらゆる種類の推測が出てきます。しかし、著作権の問題は、双方のミュージシャンの出身国間にある相違を考慮して、解決されることになりました。シーガーは、グワヒーラ・グアンタナメラの所有権を認められていて、アメリカ在住のフリアン・オルボンと著作権収入を分け合っていました。

オルボンが、ホセ・マルティの詩がついている作品バージョンについての知的所有権を主張していたからです。

一方、ホセイートは、マルティの詩でグアンタナメラを歌い始めます。そのため、以前行っていた演奏やレコードの録音で集められたバージョンと比べると、メロディーとリフレインの即興の才能は最小の表現にまで減っています。ホセイートは 1979 年の 10 月に亡くなり、80 年代の初めにはグアンタナモ出身のトレス奏者のエルミニオ・ガルシア・ウィルソン、「エル・ディアブロ」がグアンタナメラ問題に参入し、グアヒーラ・グアンタナメラに関する音楽上の提案はすべてが彼に属すると断言します。このことは、当時まで受け入れられていたこと、すなわちホセイート・フェルナンデスがこの曲の著作者であることを議論させるものでした。

ウィルソンの主張の基礎は、イントロにおけるトレスによる 3 弦を同時に弾く方法にありました。しかし、このようなリズム構成の発明者についての証拠書類は存在していません。このことは、30 年代（**）にホセイートの楽団のピアニストだったラモン・ドルカが最初にこのイントロをいれたはずであるということを導き出します。さらに、ウイルソンは、チャングィの楽団が演奏したプライベトなパーティーを盛り上げるために、前もってこの曲を作曲したのだと主張します。その動機は、この楽団の歌手のフェリーペ（ピピ）・コロナがグアンタナモ出身の女性に美辞麗句を投げた後に起こったトラブルだというのです。

それではグワヒーラ・グアンタナメラの著作権は、だれに属するのでしょうか？曲のイントロの作者は誰で、リフレインは、どこから来ているのでしょうか？新たに何人の作者が現れえるのでしょうか？

答えはたくさんありえましたし、回答できる人もたくさんいましたが、いずれも現在までコンセンサスはえられていません。ところで、この歴史の中で反論できない議論があります。つまり、ホセイート・フェルナンデスの前に誰かがグワヒーラ・グアンタナメラの問題で重大に関与したことを示す証拠、すなわち、放送して録音したということが存在しないことです。次の問題です。もしエルミニオ・ガルシア・ウィルソンがグアンタナモで音楽人生をすごし、そしてホセイート・フェルナンデスがグアンタナモに行ったことがなく、ハバナ生まれだとすれば、なぜウイルソンは、ホセイートの死後の 80 年代中ごろまで告発するのを待たなければならなかったのでしょうか。三つ目の問題です。当初から、最初にラモン・ドルカにより、その後ペシート・レイエスによって入れられたイントロが演奏可能な高品質なことから受け入れられましたが、ペペシートによるイントロが現在残っており、グアンタナメラのイントロとされているということです。では、このメロディーへのトレス奏者としてのウィルソンの寄与は何でしょうか？

否定できないことは、カルペンティエールが断言するように、グアンタナメラの起源が作者不詳であるうえ、人気のロマンス歌手、ホセイートの一部となっていることです。しかし、ではなぜ、キューバの西部から東部へ、キューバ音楽に関しては普通ではない経緯でこの曲が移動したのでしょうか。この地理的な移動にたいしては、答えがありません。というのは、農民音楽の背景のなかで、グワヒーラ・グアンタナメラはキューバ音楽の多様なバリエーションのどこにも位置しないからです。グア

ンタナメラは、その構成と演奏で、20年代以降チェオ・マルケッティによって始められたいわゆるサロンのグアヒーラに近づき、それは今日まで続いています。

また、音楽研究家のエリオ・オロビオも述べたように、「グワヒーラ・グアンタナメラの著作権は、すべての彼以前に関わることがら、またその後に関わることがらに関係なくホセイート・フェルナンデスに属するものです」。

エルミニオ・ガルシア・ウィルソンは、1998年に死亡するまで歌詞の著作権を引き続き主張しました。いろいろな事件が生じましたが、現在では、重大な真実が残っています。グワヒーラ・グアンタナメラは、莫大な著作権料をこれまで生み出してき、また現在も生み出しているうえに、全世界で最もキューバを代表する音楽のイメージであり、ホセイート・フェルナンデスが、曲の存在に対する偉大な功績を担っており、すべてのひとびとが、それを認めているということです。

注：
(*)パブロ・ケベドは30年代に亡くなり、彼の肉声での録音は存在しません。
新聞はいつも彼を「クリスタルの声」と紹介しました。ロメウ楽団で彼の代わりをするためにバルバリート・ディエスが招かれ、かれは、当時ゴメス/ディエス/オビエドのトリオを結成していました。
(**)ファクンド・リベロによって編曲された証拠文書（譜面）は存在しません。
ペペシート・レイェスの証言によれば、彼は、自作以前にファクンド・リベロとラモン・ドルカのアレンジを聴いたとのことです。

1. Carpentier, Alejo. *LA música en cuba*. Ed. Letras Cubanas, 1979.
2. Orovio Helio. *Diccionario de la Música cubana*. Ed. Letras Cubanas 1981.
i. La Guantanamera en tres Tiempos. Latin Beat. 1982
3. GarcíaMeralla, Emir. El muchacho tiene futuro. *Juventud Rebelde.* Sep. 1988.
4. Linares María Teresa. Joseíto y el contexto de la Guantanamera. *Rev. Clave*, No 11, 1988.

[1] オルケスタ・ティピカとは、19世紀に確立された編成で、コルネット、オフィクレイド、トロンボーン、クラリネット、バイオリン、ダブルベス、ティンパニー、グイロで構成されるバンド。